

平成 30 年 5 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02598

研究課題名(和文) 情報デザインのことば学

研究課題名(英文) Metapragmatic Approach to Language and Mind

研究代表者

沖田 知子 (OKITA, TOMOKO)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・招へい研究員

研究者番号：50127205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、意味論・語用論・文体論などの総合的観点から、ことばや情報のデザイン、さらにそれらを読み解く方法を考究し、新たな領域の開拓に資することができたと考える。具体的には、ことばや構図の選び方にも使い手の裁量や思惑が含まれることを押さえたうえで、物語、対話、演説、メディア報道、さらにインターネットへとジャンルを広げ、ことばと心を扱うメタ語用論からどのようにトリックやレトリックを見極めていくのかを考え、ことばのおもしろさに踏み込んだ。

研究成果の概要(英文)：This study contributes to clarify both how to design verbal information and how to interpret it from comprehensive perspectives of semantics, pragmatics, stylistics and so on. Assuming that selection of words and constructions reflects discretion or expectations of users, we make inquiries into the ways to decipher and discern tricks in various genres such as fiction, conversation, speech, media report and online information, through metapragmatic approach to language and mind, which consequently reveals fascinating aspects of language use.

研究分野：意味論・語用論・文体論

キーワード：ことば学 メタ語用論 情報デザイン 情報の修整 重層構造 推論 リテラシー

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語学的文体論研究では、従前より文体は形式か意味か、あるいは何に求めるべきかという、科学的な言語研究における基本的な論争があった。Weber (1996) は、言語学的文体論の発展を踏まえたうえで、新たな方向性としてコンテキスト重視の文体論を提唱している。これは、いわば語用論的転回として位置づけられ、さらに使い手のみならず受け手の推論による解釈にも着目する関連性理論 (Sperber and Wilson 1995) を始めとする語用論との融合研究が求められることとなった。

(2) このような観点は、科研費平成 24～26 年度基盤研究(C)「情報操作のデザイン：理論と実践」(代表研究者・稲木昭子、研究分担者・堀田知子・沖田知子)を始めとし、本研究に携わる3研究者が従来から推進してきたことばと心の関係を重視する「ことば学」と軌を一にする。本研究は、ことばと心を繋ぐ推論の働きを重視しことばに隠された心を引き出す作業を解明することば学の観点から、情報デザインを考究し、メタ語用論的意識 (Culpeper and Haugh 2014) を導入することにより、新たな文体論研究に新機軸を拓くものとなる。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、英語における情報デザインに焦点を当て、誤誘導、誘導、織り込み、盛り込み、読み込みなどさまざまな言語トリックにみられるレトリックのみならず、伝達を効果的に行うための工夫としてのレトリックの解明をめざし、新しい文体論の構築を試みる。

(2) 使われたことばと込められた心が織りなす情報の重層構造を読み解くことば学の観点を取り入れ、マイクロとマクロの両レベルから、言語情報のありさま、仕組みと働きを考究するとともに、それらを受け手がどのように解釈し、使い手の心を酌み取っていくのかという、いわば謎解きのプロセスにも焦点をあてる。英語の情報デザインに関する文体論研究の新たな可能性としてのメタ語用論を援用しながら考究するとともに、ことばのおもしろさにも迫り、新たな解釈学的転回を図るものである。

3. 研究の方法

(1) 意味論・語用論・文体論など広範な領域に亘って、ことばに仕掛けられた情報操作のみならず、いわば無標の日常的な情報デザインを含めた広い観点から、使い手のメタ語用論的意識を読み解くことにより、ことばのありさま、仕組みと働きを考究し、受け手が心得ておくべき留意点を検証する。研究対象を物語、対話、演説、メディア報道、さらにイ

ンターネットへと広げることにより、情報化社会において必要とされるリテラシーの観点からも、文体論研究の現代における意義を考察する。

(2) ことばや構図の選択には使い手の裁量や思惑による修整が行われるため、重層構造をもつ。受け手はその構造を、メタ語用論的意識をたどりつつ立体的に読み解こうとする。このような使い手や読み手双方による情報の扱い方に留意したうえで、ことば学の観点から、ことばに隠された心をもメタ語用論的に解明していくことにより、ことばのおもしろさに踏み込む。あわせて、ことばと心の重層構造をふまえた立体読みの必要性とその要点を考究する。

(3) 本研究では、量的研究による形式面での精査を取り入れつつ、これにコンテキストを視野に入れた質的研究による意味面における精査を融合するという多層的な分析方法をとることにより、より精密な言語学的文体論研究を遂行する。研究の射程を、多くの可能性の中から特定の言語表現が選択されるまでの過程、さらにはそれを解釈する際に受け手が行うであろう推論に向けた情報デザインにまで拡大して、情報をやりとりする過程をメタ語用論的意識という観点から解明する。それにより、広範な意味論的・語用論的そして文体論的枠組みの構築、すなわち「情報デザインのことば学」へと発展させていく。

(4) コーパス利用による実証研究を並行しつつ、初年度はマイクロレベルでのことばの意味と形式を超えた心の酌み取り方を考究し、次年度にはマクロレベルでのことばの仕組みと働きに焦点をあてるとともに、最終年度ではそれらを総合し広くレトリックに隠された仕掛けやメタ語用論的意識を明らかにし、さらには情報が溢れる現代におけるリテラシー能力涵養におけることば学の具体的な役割を論じる。

4. 研究成果

(1) 言語学的手法を活かしてトリックの中にみられるレトリックを踏まえつつ、レトリックに隠された仕掛けをマイクロレベルとマクロレベルの両方から分析することによって、新たな文体論構築を行った。文体論研究における手法並びに射程を拡大し、メタ語用論としてのことば学が、言語学的意義のみならず、社会にあふれる情報の中から然るべき情報を精選し、利用するリテラシー能力を涵養するうえでも、社会的、教育的意義をもつことを明らかにした。これは、ことばやそ

れに含まれる心を絞り込んでいく解釈過程を演繹的に解明するという学術的な特色をもつとともに、謎解きに似た推論を駆使したことばのおもしろさの解明、ひいてはリテラシー能力としての「ことば力」に踏み入る独創性をも併せもつものである。

(2) 論文9編、図書3冊を公開し、学会発表1件を行った。論文では、ことば学関係2編、メタ語用論関係2編、語り関係2編、解釈関係2編と認知バイアス関係1編と、多様な観点からことばと心の問題を扱った。これら研究を積み重ねることにより、情報にはさまざまなレベルでの修整や仕掛けがあることを意識して、立体的に読み解くリテラシーの重要性が浮かび上がってきた。図書3冊はいずれも、英語で書かれた情報をどのように読み解くのかという、いわばことば学の実践を行ったものと位置づけられる。学会発表では、ことば学の役割の可能性を考察した。なお、AULLA2016（オーストラリアのビクトリア大学、12月7日セッション4a“Popular Genre Fiction”）に採択されたが、諸般の事情により発表を辞退したため、それを改訂拡大した論文「『検察側の証人』のメタ語用論的分析」を公表した。

(3) 本研究は、英語学とりわけ文体論の分野で注目されている。たとえば、研究代表者が共編著し、研究分担者や連携研究者の論文が掲載された『英語のデザインを読む』（英宝社、2016年）は、「言語学/英語学・今年のベスト3」（『英語教育』2016年10月号）に選出され、『英語年鑑2017』『回顧と展望—文体論』ではことば学の特徴である「『英語の楽しさ』から『英語の真髄』に迫る姿勢」がとりあげられた。

(4) 研究代表者・研究分担者・連携研究者による共著『ことばのインテリジェンス—トリックとレトリック』（開拓社、2018年4月刊）はこれまでの研究成果のまとめとして、意味論・語用論・文体論などの総合的観点から、ことばや情報のデザイン、さらにそれらを読み解くことばのインテリジェンスを論じたものである。また『英語年鑑2016』において「メディアにおける情報操作を明確に分析した高論」と評価された論考のエッセンスも収めている。物語、対話、演説、メディア報道、さらにインターネットへとジャンルを広げ、メタ語用論的意識からどのようにトリックやレトリックを見極めていくかを考え、ことばのおもしろさに踏み込んだ。

<引用文献>

Weber, J. J. (1996), *The Stylistics*

Reader: from Roman Jakobson to the Present, Arnold, London.

Sperber, D. and Wilson, D. (1995), *Relevance: Communication and Cognition* (2nd ed.), Blackwell, Oxford.

Culpeper, J. and Haugh, M. (2014), *Pragmatics and the English Language*, Palgrave Macmillan, Basingstoke, Hampshire.

豊田 昌倫、言語学/英語学・今年のベスト3、英語教育、2016年10月増刊号、84-85

豊田 昌倫、回顧と展望—文体論の研究、研究社『英語年鑑2017』、2017、64-67

豊田 昌倫、回顧と展望—文体論の研究、研究社『英語年鑑2016』、2016、65-68

堀田 知子、稲木 昭子、沖田 知子、メディアと情報操作、龍谷紀要、36巻2号、2015、119-130

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計9件)

沖田 知子、しこうして、ことば学、言語文化共同研究プロジェクト『時空と認知の言語学』、査読無、号、2017、11-20
DOI: 10.18910/62061

沖田 知子、ことば学とコミュニケーション、開拓社『英語教育徹底リフレッシュ—グローバル化と21世紀型の教育』、査読無、1巻、2017、225-232

堀田 知子、稲木 昭子、沖田 知子、『検察側の証人』のメタ語用論的分析、龍谷紀要、査読無、38巻2号、2017、81-89
<https://opac.ryukoku.ac.jp/webopac/TD32021261>

沖田 知子、メタ語用論的意識の流れ、言語文化共同研究プロジェクト『時空と認知の言語学』、査読無、号、2016、11-20
DOI: 10.18910/57346

堀田 知子、稲木 昭子、沖田 知子、『アクロイド』の語りのデザイン、龍谷紀要、査読無、37巻2号、2016、1-13
<https://opac.ryukoku.ac.jp/webopac/TD00574009>

堀田 知子、語りと過去完了、阪大英文学会叢書『英語のデザインを読む』、査読有、8号、2015、65-77

稲木 昭子、沖田 知子、公爵夫人の講釈、阪大英文学会叢書『英語のデザインを読む』、査読有、8号、2015、229-240

沖田 知子、アリスのことばの不思議—無茶会の謎解き、學士會会報、査読無、914号、2015、58-63

沖田 知子、ブラックスワンと発見法、言語文化共同研究プロジェクト『時空と認知の言語学』、査読無、号、2015、11-20
DOI: 10.18910/53774

〔学会発表〕(計1件)

沖田 知子、ことば学の可能性、日本英文
学会関西支部大会、武庫川女子大学、2015
年12月20日

〔図書〕(計3件)

沖田 知子、堀田 知子、稲木 昭子、開拓
社、ことばのインテリジェンス・トリッ
クとレトリック、2018、229
(ISBN978-4-7589-1825-1 C3380)

稲木 昭子、沖田 知子、大阪大学出版会、
アリスのことば学 2—鏡の国のプリズム、
2017、248
(ISBN978-4-87259-600-7 C1080)

沖田 知子、米本 弘一(共編)、英宝社、
英語のデザインを読む(阪大英文学会叢
書8)、2015、253
(ISBN978-4-269-77053-9 C1082)

6. 研究組織

(1)研究代表者

沖田 知子(OKITA, Tomoko)
大阪大学・大学院言語文化研究科・招へい
研究員
研究者番号：50127205

(2)研究分担者

堀田 知子(HOTTA, Tomoko)
龍谷大学・社会学部・教授
研究者番号：90209255

(3)連携研究者

稲木 昭子(INAKI, Akiko)
追手門学院大学・国際教養学部・名誉教授
研究者番号：50151577